

『老子』を高校・大学の教室でどう読むか

コーディネーター

前筑波大学附属高等学校 渡邊 雅之

パネリスト

前茨城県立土浦高等学校 清水 智恵

文教大学 渡邊 大

『老子』を高校・大学の教室でどう読むか

渡邊 雅之

◎ このシンポジウム企画の意図

道家思想、とくに『老子』はきわめて難解である。そのため高校教科書では、「国語総合」には一社も取り上げない。また、「古典」の教科書でも、第十一章「三十輻共一轂」、第八十章「小国寡民」などすべてを合わせても十章程度しか掲載されていない。さらに、かりに『老子』が教科書にあっても実際の授業で行われることはほとんどないというのが現状である。

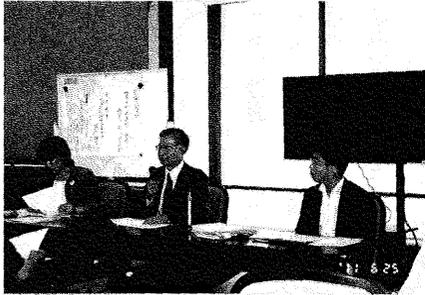
しかし一方で、実際に授業で道家の『老子』『莊子』な

どを取り上げると、生徒には意外と好評である。逆説など通常とは異なる視点での考え方が、かえって新鮮に映るためかもしれない。また、内省的な思索の場となりうるため、興味をそそられるのかもしれない。

そこで、大学や高校でもっと『老子』を扱えるのではないかとこのことでの今回の企画であった。

◎ 実践の方法

高校では、土浦第一高校の清水智恵氏、大学では文教大学の渡邊大氏が担当され、高校・大学でそれぞれ以下の実践を試み、その結果を発表した。



今回は複数解釈のある、問題点を含んだ次の二章を取り上げ、高校生・大学生がどう解釈するかを見た。

第三十三章

知人者智。自知者明。勝人者有力。自勝者強。知足者富。強行者有志。不失其所者久。死而不亡者寿。

第三十三章では二つの箇所

・「強行者有志」のとくに「志」の意味合いについて「志」は『老子』ではマイナス評価の語のはず。

・「死而不亡者寿」で、「不亡」の「亡」は、「忘」「妄」に作る説がある。

第四十四章

名与身孰親。身与貨孰多。得与亡孰病。是故甚愛必大費。多藏必厚亡。知足不辱。知止不殆。可以長久。

・「得与亡孰病」で、結論はどちらなのか。得の方が病なのか、亡の方が病なのか。

二つの章とも解釈に大きな違いがある点について留意し、それぞれの教室で議論した。

(前筑波大学附属高等学校)

『老子』を高校の教室でどう読むか

清水 智恵

一 実践のねらい

今回の企画を実践するにあたり、次の二項目を柱とした。1 文章表現の矛盾や、文字の相違による解釈の揺れを手掛かりに読解を深める。

2 授業を彼ら(高三生)の豊かな思索の場とする。

実際は、三十三章と四十四章を五十五分で行うクラスと

三十三章のみを四十分で行うクラスが生じたが、ねらいをより活かせたのは後者で、次はこちらのクラスで得られた声である。

二 教室の声(◇が生徒発言)

【三十三章本文】①知人者智、自知者明。②勝人者有力、

自勝者強。③知足者富、強行者有志。④不失其所者久、死而不亡者壽。

①・②の読解を踏まえ、発問A・Bを軸に③・④に進む。発問A・③の後半部「強行」や「志」の是認は、これまで読み取った老子の思想と矛盾しないか。

◇「知足」を身の程を弁えるところ、「強行」を自分に合った課題設定ができると考える。◇「強行」を老子はよくおもっていないはず。無理して努力する人間は、志があつて(ためだ)。志は無益な努力のようなニユアンス…。

発問B・④の後半「不亡」は、「不忘」とする資料も出土した。それぞれを解釈し、どちらがより深いか考えよう。

◇「亡」には滅ぶ、失うの意味もあるので、人々の心の中に限らず失われなことを意味する。◇「亡」とした場合には現世に残した影響すべてが、「忘」とした場合には周囲の人間の記憶からなくなるということ。「亡」の方が思想を説く諸子百家としては深い発言になる。

三 実践を終えて

教科書に掲載されない教材を、辞書を使って読み進む作業は、新鮮で達成感に満ちていたようだ。一字、一字確認し、論理的に解釈しようと格闘するが、彼らの解く数学の問題が時に「解無し」に行き当たることがあるように、不意に「死而不亡」と行き止まりに出くわす。その閉じた出口を、興味津々探索した生徒たちからは「自分で様々な解釈を考えることで、固定された過去の文ではなく、自分たちが使っている日本語と同じような生きた文として感じることができた。」という感想が得られた。思索を深める教材として、また一方通行ではない、生徒が主体となる授業作りに、『老子』を高校の教室で役立たせたい。

(前茨城県立土浦第一高等学校)

大学の教室で『老子』をどう読むか

渡邊 大

大学で何を学ぶのか。一教員としては、「専門を通じて自分の頭で考える力」だと答えたい。『老子』を通して研究に対する認識を深めることを目標に、学生とともに試行錯誤してみた。

授業は中国語中国文学科の三、四年次を対象とする演習

科目で受講者は三四名。期末レポートの提出だけを最初に決め、あとは学生と相談しつつ授業を進めることになった。

まず、対象の各章を各自で検討し、考察の方策について考えた。「伝記」、「注釈」、「研究史」等のキーワードが挙げられ、手始めに史記老子列伝を読むことになった。「孔老会见は創作」、「老子の実在は怪しい」等の意見は出たが、老子の伝が、荘子、申不害、韓非らとひとつに括られていることについての疑問は出なかった。そこで史記中の老子関連記事を検討し、それらが特定の立場からなされたものであること、事実も虚構も含まれていることなどを確認し、それらを考慮してはじめて司馬遷当時の『老子』の一斑を窺うことができることを指摘した。続いて、『老子』の成立について考えた。『老子』の内容、先秦諸子との比較、引用の検討という基本的方法を解説し、研究動向、特に出土資料によって明らかになったこと、ならなかったことを講義し、目録学、校勘学の成果も紹介した。

以上を下準備として『老子』本文と取り組んだ。まず第一章を王弼注と河上公注とで読んだ。第三三章、四四章については、邦訳を比較・検討した後、全章(経文のみ)と金谷治「死して亡びざるものは寿―老子の死生観」を配布、

各自レポートを作成した。その際、学生を悩ませたのはやはり『老子の存在そのものがあやふやなら、そこから派生する研究の根拠は全てないようなものではないだろうか。』との戸惑いであった。しかし例えば原義の束縛から抜け出し、王弼注から王弼を読むという態度までもう一步の者、また、「死而不忘者寿」（馬王堆本）、「死而不妄者寿」（河上公注本）、「死而不亡者寿」（通行本）と、その時々で姿を変える『老子』をそのまま受け入れようとする者もいた。

『老子』を読み、自ら哲学し、文学することも重要である。ただ（文字面だけでなく）資料から何を読み取れるのか、メタレベルで眺める目、思考する頭を養うこともまた重要ではないか。その点でも『老子』は格好の対象といえる。あやふやなことばかりの中で、何が言え、何が言えないのかを確かめながら、より正確な認識へと蓋然性を高めていく術を学ぶのも大学の役割だと思ふ。

（文教大学）